

今月の視点

最近の感染症と予防接種

常任理事 藤本 俊文

山口県感染症健康危機管理対策協議会という会議がある。山口大学大学院医学系研究科救急・総合診療医学分野の鶴田良介 教授を会長に山口大学の呼吸器科・小児科教授、感染症の病床をもった病院長、小児感染症のエキスパート、保健所長などが集まり、山口県健康増進課の報告を基に協議している。充て職で私も参加しているので、その内容と、定期予防接種以外の予防接種を行っている市町の現状について紹介する。

平成 30 年 1 月 17 日（水）の会議では平成 29 年の届出感染症他について報告があり、腸管出血性大腸菌感染症では総数 22 件（O-26 が 11 件、O-157 が 8 件、O-121 が 2 件、O-165 が 1 件）であったが、幸い集団発生の事例はなかった。インフルエンザはクリスマスまでの状況であるが、昨シーズンより 2 週間遅い開始であったが、その後に急増し、4 週間早い注意報レベルとなった。病原体は昨年同様に A/H3（香港）、A/H1pdm09、B 型（山形系統）が検出されている。HIV/AIDS については、全国では感染者・患者合わせて 1,448 人おり、山口県では平成 20～22 年のピークよりは減少しているが、28 年は新規感染者 6 人と患者 1 人が発生している。保健所での抗体検査数が 797 件と減少しているのが気になったが、説明では民間の自宅での検査（有料）が増加しており、問題はないとのことであった。若年層を対象とした啓発活動・エイズ教育や休日電話相談なども継続するとのことである。医療者としては針刺し事故に備えた抗 HIV 薬の配備であるが、県内 5 医療機関（関門医療センター・山口大学・

山口宇部医療センター・県立総合医療センター・岩国医療センター）で準備してあるとのことである。事故後早急な対応が必要であり、ここで、その対応について紹介する。

HIV は HBV や HCV と比較してその感染力は極めて弱く、針刺し事故において全く予防内服を行わなかった場合でも感染確率は 0.3% 程度。その上、ジドブジン（AZT）単剤による予防内服でも感染リスクを 80% 以上低下させるが、2 剤ないしは 3 剤を併用した予防内服ではほぼ 0% となる。受傷したら曝露部位を多量の流水と石けん（眼球・粘膜への曝露の場合は大量の流水）で洗浄することが重要である。受傷部位から血液を絞りだそうとする試みや、曝露部位への消毒剤の使用などは有効性が証明されておらず、予防内服開始までの貴重な時間を失うことになるため推奨されていない。推奨されるレジメンはラルテグラビル（RAL）400mg 1 回 1 錠 1 日 2 回＋テノホビル／エムトリシタピン（TDF/FTC）1 回 1 錠 1 日 1 回であるが、代替レジメンもある。

結核については新規登録患者数は減少傾向で、平成 28 年は 178 人であった。人口 10 万人当たり 12.8 人で全国よりも 1.1 ポイント低い。ただ、70 歳以上の人が 7 割以上で、20～39 歳では 74% が外国籍であったことから注意を要する。山口県保健医療計画が策定されているが、この中で結核病床の基準病床数を算定するルールが決められている。これによると現在、基準病床数は平成 23 年の統計から算出されたもので 37 床であるが、今後、28 年統計から 23 床に減少することとなる。ただし、強制するものではなく、目安

ととらえるべきと考える。

麻疹・風疹については昨年は報告がなく、疑いで 7 件検査はしたが検出しなかったものばかりであった。ただし、麻疹については昨年は東広島市の保育園、三重県の工場、山形県の自動車教習所などで集団感染の報告があり、注意を要する。この予防接種率は第 2 期は全国 1 位の 97% であるが、第 1 期は 31 位で 96.6% と注意喚起が必要である。保健所で行っている風疹検査は先天性風疹症候群を防止するために行っていたが、検査数が減少し、昨年は 16 件になったため、平成 30 年度は廃止の方向とのことである。

重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) は昨年未までに全国で 319 例の報告があり、そのうち山口県は 29 例と、宮崎・鹿児島に次いで多い発生である。蚊やダニからの感染が主体であるが、最近はいヌやネコからの感染が注目され、飼育しているイヌやネコの血液・糞便からウイルスが検出された事例及び体調不良のネコからの咬創歴がある人が SFTS を発症し死亡した事例が確認されている点は注意すべきである。

梅毒は年間一桁台の発生が続いていたが、平成 29 年は前年の 2 倍以上の 22 例 (男 > 女) の報告があった。内訳では 20 代～50 代の届出が増えており、中でも 20 代の報告が 8 例と多かった。女性では前年と比較し 20 代の若い女性の報告が 5 例と目立っていた。県としてはリーフレットを作成し、高校などにも配布している。また、保健所で HIV 検査受検者の中で 522 人の希望者に検査を行った。

薬剤耐性 (AMR) については、カルバペネム耐性腸内細菌 (CRE) 感染症・バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌 (VESA) 感染症・バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) 感染症・薬剤耐性アシネトバクター (MDRA) 感染症の届出が義務付けられている。このうち CRE は昨年 37 例の発生があり、中小規模の医療機関における院内感染対策の体制及び医療機関連携強化の必要性が考えられる。

この会議では以上のような内容の協議を行っているが、時には新型インフルエンザや MERS のような水際での対策などもこの会議で検討してい

る。オリンピックに向けて訪日観光客も過去最高となるなど、今後も輸入感染症については注意深い対応が必要となる。また、山口県感染症情報センターではホームページ (http://kanpokken.pref.yamaguchi.lg.jp/jyoho/report2018/2018w_1.php) で検索できる週報を掲載しているので、最近の流行が気になる方はここで情報を得られる。

予防接種については、最近では HPV・Hib・小児肺炎球菌・水痘・B 型肝炎ワクチンなどが定期接種化され、先進諸国との格差の減少が認められる。しかしながら、未だにおたふくかぜやロタウイルスなど、有用と分かっているにもかかわらず定期化されていないものがある。そのような中、県医師会の調査資料 (平成 29 年：未公表) によると、県内でロタは 4 市、おたふくかぜは 3 市で助成されるなど、特に宇部市・岩国市・長門市・周防大島町など定期以外のワクチンに対して複数助成している市町もあり、市町間で格差のあることが判明した。無論、予算の伴うことであり、無理の言えることではないが、予防接種することで子供の将来に不安を与えないことは大きな意義があると考えられる。今後、定期接種化されるまでの間、たとえ選挙権を持っていなくても、未来ある子供たちのために助成する市町が増えることを希望する。

県下唯一の医書出版協会特約店

医学書専門 井上書店
看護学書

〒755-8566 宇部市南小串2丁目3-1(山口大学医学部横)

TEL 0836 (34) 3424 FAX 0836 (34) 3090

[ホームページアドレス] <http://www.mmm-inoue.co.jp/mb>

新刊の試覧・山銀の自動振替をご利用下さい。